奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

令和四年十二月度　入賞句一覧　投句数　五百九十二句

一般の部

名和　永山　選

特選

毛糸編むきつと死ぬまで好きな色　愛知県西尾市　金子　恵美

季語「毛糸編む」で冬。編み棒で編んでいる女性の姿を思い浮かべることができる。「きつと死ぬまで好きな色」と言われ、そういえば、私は薄い水色が好きで、小学生からずっと変わっていない。時たま、赤や緑にも目を移すが、やっぱり水色が好き。誰にでもある何気ないことの発見は、俳句の良き素材である。

秋晴やティースプーンに写る顔　大垣市　川瀬　恭子

この句の良さは、季語「秋晴」との取合わせの上手さである。秋晴れの澄み切った空。心も爽やかに、お茶でも飲もうと。「ティースプーン」が、作者の軽やかな姿を想像させている。これが普通の「スプーン」では表すことができない。そしてそのスプーンに写った顔が、にこやかであることも、自然に目に映る。読者は、スプーンの内側（凹面）の顔を想像しますか、それとも外側（凸面）を想像しますか。どちらにも、作者の嬉しそうな顔が映っていますね。

吊し柿昨日の色を逃しけり　大垣市　吉川　和子

季語「吊し柿」は干し柿にするために、渋柿の皮を剥いて干すのだが、日に日に色は黒ずんでくる。昨日の色が変わったことを「昨日の色を逃がしけり」と、擬人化したことにより、吊し柿が生きているようにも思える。「逃しけり」と切れ字「けり」も効果的である。

秀逸

それぞれの樹相のあらは凩来　養老郡養老町　田中　紫香

懐妊は千代の福音小鳥来る　岐阜市　堀江　美州

冬晴れやクレーン高き浚渫船　大垣市　樋口　絹子

庭師来て秋日大きくなりにけり　大垣市　髙津　喜久子

飛行機雲岐阜城射抜く秋の朝　岐阜市　村瀬　充夫

アルプスを背にする稲架や日の香り　各務原市　桑原　緑

腹割りて話したし鯛焼ふたつ　大垣市　田口　貞善

竹箒並ぶ庫裡裏十二月　大垣市　今津　絹代

凩や薪足して聞く湯の加減　大垣市　吉田　てるみ

病名は調べずにおく冬木立　不破郡垂井町　小坂　久美子

入選

胸中の空洞続く秋の暮　大垣市　井沢　美志津

実南天迎へられ入る生家かな　大垣市　石垣　珠泉

秋惜しむこころ引きずる影法師　不破郡垂井町　川瀬　慶泉

雁渡る美濃も近江も茜雲　大垣市　酒井　和美

新蕎麦も妣の好みの味となり　東京都狛江市　椎野　一恵

石蕗の花や水軍長の邸　大垣市　立川　昌子

梵鐘の告げる音色が秋が友　大垣市　土屋　和馬

晩稲刈る野良着の袖のほつれ糸　大垣市　平野　きぬよ

湯ざめして少年マンガ上下巻　養老郡養老町　松永　智志

夫への不満を叩く布団干　大垣市　宮上　美濃留

退院を暦にしるし布団干す　養老郡養老町　山田　順子

茶の花の垣根目で褒め遠会釈　本巣市　小泉　裕子

信長の騎馬行列や秋うらら　大垣市　久保田　悟義

園児等が秋みつけてはポケットに　岐阜市　後藤　三恵

山寺を厳かにせし照紅葉　三重県四日市市　井戸　康子

神木に屯す鳥や神の留守　揖斐郡大野町　横山　道男

狛犬の口元緩む神の留守　大垣市　柴田　えり子

入相の音色ぬらせり初しぐれ　大垣市　森　茂寿

鞍上のキムタク去りて冬に入る　本巣市　土川　楽人

ためらひも共に折り取り藤袴　愛媛県松山市　平野　ヒサエ

選者吟

鐘の無き火の見櫓や冬夕焼　永　山

一般の部